

(様式3)

農業研究成果情報

No. 760 (平成28年5月) 分類コード 02-08 熊本県農林水産部

冬期に低温となる地域における秋予備整枝と春整枝の組み合わせによる一番茶安定生産技術

冬期に低温となる球磨地域などでは、想定される整枝面から50ミリ高い位置で行う10月下旬の秋予備整枝と、萌芽期20日前の春整枝を組み合わせることで、安定した一番茶収量を得ることができる。

農業研究センター球磨農業研究所 (担当者: 坂本孝義)

研究のねらい

秋整枝は春整枝と比較すると翌年一番茶芽の萌芽期が早く、芽揃いも良く、摘採時期が早くなることから、県内では平均気温が20℃以下になるのを目安に秋整枝がなされている。ところが、近年では温暖化傾向にあることから、越冬芽の耐凍性が十分に確保されないままに低温に遭遇していることが推察される。特に、冬期に低温となる球磨地域などでは越冬芽が枯死する被害が発生しており、整枝法については再検討する必要がある。

そこで、整枝法が一番茶の摘採時期や収量に及ぼす影響を明らかにする。

研究の成果

1. 球磨地域においては、秋整枝は、整枝後の低温により枯死芽や新芽が湾曲する等の異常芽の発生が多くなるが、秋予備整枝と春整枝を組み合わせは、春整枝と同様に枯死芽が無く異常芽も少ない。秋予備整枝と春整枝の組み合わせは、春整枝や秋整枝と萌芽期がほぼ同等である(表1)。
2. 秋予備整枝と春整枝の組み合わせは、秋整枝や春整枝と比較して一番茶の収量が多い。特に、想定される整枝面から50ミリ高い位置で行う10月下旬の秋予備整枝と、萌芽期20日前の春整枝を組み合わせることで、一番茶の収量は同等もしくは多くなる(表2)。

普及上の留意点

1. 本試験は、‘やぶきた(1969年定植)’を供試し、球磨農業研究所(標高166m、年平均気温15.2℃、図1)での試験結果である。
2. ‘やぶきた’の一番茶萌芽期は前5ヶ年平均で3月29日である。

表 1. 整枝法の違いが越冬芽と一番茶萌芽に及ぼす影響

試験区	2014 年				2015 年			
	枯死 芽率 (%)	異常 芽率 (%)	整枝面と 枯死芽の 距離 (mm)	萌芽期 (月日)	枯死 芽率 (%)	異常 芽率 (%)	整枝面と 枯死芽の 距離 (mm)	萌芽期 (月日)
30mm 秋予備 整枝+春整枝	0	7	-	3月29日	2	3	-	4月1日
50mm 秋予備 整枝+春整枝	0	9	-	3月29日	0	1	-	4月1日
春整枝	0	11	-	3月30日	0	0	-	4月2日
(対照) 秋整枝	16	40	14±7	3月29日	12	13	20±8	4月2日

注 1) 秋整枝や秋予備整枝は 2014 年が前年 10 月 27 日、2015 年が前年 10 月 28 日、春整枝は 3 月 10 日に行った。

注 2) 防霜ファンを 2℃設定で、2014 年は 3 月 10 日から、2015 年は 3 月 11 日から稼働した。

注 3) 萌芽期に各処理区の任意の 2ヶ所、20×20cm 枠内の枯死芽や異常芽を計数した。また、秋整枝区については枯死芽のある 20 母枝について、整枝面から枯死芽の基部までの距離を計測した。

表 2. 整枝法の違いが一番茶収量に及ぼす影響

試験区	2014 年			2015 年		
	生葉収量 (kg/10a)	指数	出開度 (%)	生葉収量 (kg/10a)	指数	出開度 (%)
30mm 秋予備整枝+春整枝	390	108	16	579	124	67
50mm 秋予備整枝+春整枝	443	123	15	580	124	58
春整枝	389	108	18	518	111	54
(対照) 秋整枝	361	100	21	467	100	74

注 1) 2014 年は 4 月 30 日、2015 年は 4 月 29 日に摘採した。

注 2) 異なる英小文字は Tukey 法の多重比較 (5%水準) で有意差があることを示す。

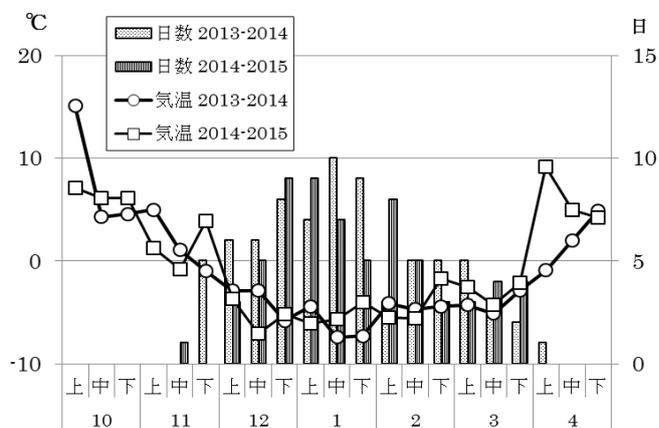


図 1. 球磨農業研究所における旬毎の最低気温と、気温が 0℃を下回った日数